

平成 30 年 6 月 19 日現在

機関番号：13601

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15H03155

研究課題名(和文) インド仏教論理学の東アジア世界における受容と展開 因明学の再評価を目指して

研究課題名(英文) The Acceptance and Development of Indian Buddhist Logic in East Asia

研究代表者

護山 真也 (MORIYAMA, Shinya)

信州大学・学術研究院人文科学系・准教授

研究者番号：60467199

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 13,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、インド・チベット仏教における仏教認識論・論理学研究の成果と東アジアで展開した因明学の成果とを架橋することで、言語や文化の壁を越えて継承・変容した仏教認識論・論理学の特質を明らかにすることを目的とした。その主たる成果は、第18回国際仏教学会(IABS)のパネル“Transmission and Transformation of Buddhist Logic and Epistemology in East Asia”での発表と討議に結実しており、近くWiener Studien zur Tibetologie und Buddhismuskund シリーズから出版予定である。

研究成果の概要(英文)：Before starting this project, the study of Buddhist logic and epistemology was divided into two different area studies. The primary purpose of this project is to bridge between Indo-Tibetan pramana study and East Asian yinming/inmyo study and to produce a new, transdisciplinary field of research for Buddhist logic and epistemology. For this purpose, specialists of both areas came together and discussed on “wrong rejoinder” (jati) section of Dignaga’s Nyayamukha and its newly-discovered commentary by Japanese monk Shamon Shu together with its related Sanskrit materials from Jinendrabuddhi’s commentary on Dignaga’s Pramanasamuccaya VI. In addition, we arranged a panel “Transmission and Transformation of Buddhist Logic and Epistemology in East Asia” in XVIIIth International Association of Buddhist Studies at Toronto 2017 and presented each study on this new field. The result will appear soon as a volume from series of Wiener Studien zur Tibetologie und Buddhismuskunde.

研究分野：仏教認識論

キーワード：因明 仏教論理学 玄奘 基 因明正理門論 因明入正理論 ディグナーガ

## 1. 研究開始当初の背景

陳那 (Dignāga, 5-6 世紀) にはじまる仏教認識論・論理学の伝統は、玄奘や義浄による『因明正理門論』(Nyāyamukha) や『因明入正理論』(Nyāyapraveśaka) の漢訳文献とそれに対する注釈を通して、東アジア世界で受容され、因明学として確立された。この伝統は中国では途絶えたものの、日本では元興寺や興福寺を中心にその法脈が受け継がれ、近代に至るまで学問の対象とされてきた。

勿論、それは漢訳文献を中心とした理解であるため、梵文資料から知られるディグナーガの論理学の理解とは相違する箇所も少なくない。そのため、ともすれば因明学は、インド・チベット仏教における仏教認識論・論理学に比して不正確なものという評価を与えられてしまう。実際、仏教研究の主流が梵文・蔵文資料に基づく文献実証的な思想史研究へと傾斜してゆくなかで、因明学に対する研究が下火になった背景の一つには、そのような暗黙の評価があったと考えられる。

例えば、因明学の基礎を築いた慈恩大師基(7世紀)の『因明入正理論疏』に対して、中村元は、「インドの論理学がシナに移入された場合に、慈恩大師は因明の規定する推論の意義を十分に理解することができなかったのではないかと考えられる。彼は形式論理学の中核の問題について理解を欠いていた」(『因明入正理論疏改題』p. 5) と厳しい批評を加えたが、ここには典型的な形で、仏教論理学研究における因明学の有用性に対する疑念が表明されている。

その後、仏教論理学研究の軸がインド・チベット仏教の思想史研究にシフトするなか、因明学が等閑視される時代が続く。ところが、近年になって、海外において、この因明学を再評価する気運が高まってきた。2012年8月に開催された第5回北京国際チベット学セミナーにおける因明パネル、台湾における「6-7世紀中国におけるインド仏教思想」プロジェクトの主導者・林鎮國教授(国立政治大学)が2012年10月に開催した国際ワークショップ「漢訳文献における仏教認識論・論理学」(Buddhist Logic and Epistemology in Chinese Sources) は、因明学再評価の嚆矢となる企画であった。さらに、2014年8月にウィーン大学で開催された国際仏教学会(IABS)におけるE. Franco教授とJ. Woo教授のパネル「アジアを越境するプラマーナ(仏教認識論)」(Pramāṇa across Asia) は、因明学を見直すことで、ディグナーガの論理学の射程が明確になるという事実を多くの仏教研究者に印象づけることになった。

自身そのパネルに参加することで、因明学の再評価の流れを実感した護山(研究代表者)は、日本の仏教認識論・論理学の研究でもあらためて因明学に目を向けた方がよいのではないかと考えるに至った。折しも、日本で因明学の研究を精力的に進めていた数少ない研究者の一人である師(研究分担者)

が、大著『論理と歴史—東アジア仏教論理学の形成と展開』(ナカニシヤ出版、2015)を上梓した頃のことである。師は、この著書のなかで、因明学の中心論題の一つである玄奘の唯識比量に関する東アジア仏教の解釈を詳細に分析し、中村の理解とは違う形で、因明学の価値を見直すことできることを示したのだが、まさにその点こそが、本研究でもあらためて問い直されることになった。

ただ、その課題の達成には、インド・チベット仏教を中心として仏教認識論・論理学を研究してきた側からの協力が不可欠である。幸運なことに、同じ頃、ダルマキールティ研究者である稲見(研究分担者)にも同様の問題意識が共有されていた。稲見は、「インド仏教論理学の受容と展開—チベット・中国・日本—」(2011)において、『正理門論』(Nyāyamukha) 『入正理論』(Nyāyapraveśaka) の東アジア世界における受容の歴史を概観し、そのなかで、因明学の理解がインド仏教論理学の理解に寄与することを指摘した。

さらに、この時期には、ディグナーガ研究も新たな局面を迎えていた。チベット語訳しか残されていない彼の主著『集量論』の梵文を復元するための最も有力な資料となるジネンドラブディの『集量論注』の梵文写本が発見されたのである。このセンセーショナルな発見により、漢訳しか残されていない『正理門論』にも研究者の関心が注がれるようになった。というのも、『集量論』の梵文の復元作業を通して、それとパラレルな『正理門論』の梵文も推定され得るからである。その中心的研究者の一人である小野(研究分担者)は、『集量論』第6章、すなわち過類(jāti)セクションにおいても、漢訳『正理門論』の「過類」段の梵文が再構成可能であり、それはインド討論術・論理学史の観点から貴重な成果になることに注目していた。

本研究は、これらの研究者の関心が一致したところから開始された。従来、インド・チベット仏教を中心とする仏教認識論・論理学研究と漢訳文献を中心とする因明学とは領域を異にするものと考えられてきたが、本研究では、その慣習に風穴を開け、二つの領域の研究者のネットワークを構築することが目指されるに至ったのである。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、インド・チベット仏教における仏教認識論・論理学研究の成果と東アジアで継承・展開してきた因明学の成果とを架橋することで、それぞれの領域の研究だけでは見ることのなかった仏教認識論・論理学の特質を明らかにすることにある。

この研究では、インド・チベット仏教の専門家と中国仏教・中国思想の専門家が共同の討議を行うことで、それぞれの閉じた領域に外部からの眼差しを投げ入れ、次の諸点から、相互の連関を見出すことが目的とされた。

(1) 漢訳仏典を利用したインド仏教認識論・

## 論理学の解明

ディグナーガの『集量論』第6章の梵文復元作業を通して、『正理門論』「過類」段の梵文復元を目指し、それと関連する『如實論』など、漢訳された初期の論理学文献との思想的関係を明確にする。

また、護法(Dharmapāla, 6世紀)の『成唯識宝生論』などを資料とし、仏教認識論の展開における護法の位置づけを探る。

### (2) 玄奘とその弟子の仏教論理学理解の検証

中村は、基をはじめとする玄奘門下の学僧たちの仏教論理学に対する理解には大きな問題があると指摘したが、その指摘は妥当か。この点を確認するために、基の『因明入正理論疏』のなかでも最も込み入った議論が展開される四相違(viruddha- hetu)のセクションを解読し、基の論理学理解の妥当性を検証する。

同様に、「間違った主張」(pakṣābhāsa, 宗過)についても基をはじめとする玄奘門下の学僧の理解と、インド仏教における議論とを比較することで、その理解のどこに問題があるのか、が明らかになる。

また、玄奘の論理学理解を問う際に問題となるのが、彼が提示したとされる「唯識比量」と呼ばれる推論式であるが、この推論式の解釈についても検討を加える。

### (3) 朝鮮・日本での因明学の展開の考察

師は、聖語蔵所蔵の経巻のなかに、沙門宗に帰せられる『因明正理門論注』断片を発見した。この成果を受け、「過類」に対する注釈部分を、(1)で言及した『正理門論』「過類」段の梵文復元の成果と合わせて考察することで、この注釈書の価値を見定める。また、漢訳『正理門論』や『方便心論』のテキスト校訂のためには、日本古写経にもアクセスし、そのテキストの原型を確定する試みが必要となる。研究協力者の室屋が、そのための資料調査にあたる。

## 3. 研究の方法

先に「研究の目的」で記載した内容を遂行するために、以下のような役割分担を行い、各人がそれぞれの課題の達成を目指して研究を重ねる。年2回のペースで合同の研究会(因明科研究研究会)を開催し、研究成果を発表し、共通の資料を用いて、共同討議を行う。また、最終年度には、国際学会(XVIIIth Congress of the International Association of Buddhist Studies)でパネルを企画し、広く海外の研究者に向かって、この研究の成果を発信する。以上が、研究方法の方針である。

### <役割分担>

(1) 護山(研究代表者):『因明入正理論疏』「四相違」セクションの解読研究を担当する。また、護法『成唯識宝生論』および基『唯識二重論述記』の他心知に関する解説部分の解読を行い、護法の認識論

についての研究を遂行する。

- (2) 小野(研究分担者):研究協力者である室屋・渡辺とチームを作り、ジネンドラブディ『集量論注』第6章の梵文テキスト校訂ならびに『集量論』第6章の梵文復元のための研究を遂行する。また、それと並行して『正理門論』「過類」段の梵文推定を進める。また、小野はディグナーガ以前の論理学書のなかでも、ディグナーガとの関係の深い『如實論』についても研究を実施する。
- (3) 稲見(研究分担者):広くインド仏教論理学における「間違った主張」の定義と解説を見直し、因明文献における「宗過」の議論との比較を行う。
- (4) 師(研究分担者):聖語蔵所蔵の沙門宗『正理門論注』断片における「過類」の箇所解読研究を遂行する。また、因明文献で扱われる「唯識比量」「掌珍比量」「勝軍比量」を総合的に研究する。それと同時に、明治期における日本の因明研究についても調査を行う。
- (5) 室屋(研究協力者):日本古写経の調査を行い、『方便心論』『正理門論』の漢訳テキストの問題点を明らかにする。

### <研究会および調査旅行など>

- (1) 第1回因明科研究研究会(2015.9.21, 花園大学)
1. 「明治における因明研究」(師茂樹)
  2. 「100年の仏教論理学研究史」(桂紹隆)
  3. 「聖語蔵所収の沙門宗『因明正理門論注』について」(師茂樹),
  4. 「パネル「過類(jāti)をめぐる—ディグナーガに至るvādaの伝統の解明への一視点—」をふりかえって」(小野基)
- (2) 第2回因明科研究研究会(2016.3.26, 東京学芸大学)『正理門論』「誤難」セクションの梵語、注釈、沙門宗の注釈の総合的解読(小野・師・室屋・渡辺)
- (3) 第3回因明科研究研究会(2016.8.29-30, 信州大学)
1. “Logic, Scripture, and Hermeneutics in Zhencheng’s Critique of the Thesis of No-motion” (Lin Chen-kuo)
  2. “Materials for the Study of Xuanzang’s Inference for Consciousness-only (vijñāptimātratā)”, “The Nyāyamukha passage on acandraḥ śāśī: A survey of its interpretation in Hetuvidyā literature” (Tang Mingjun)
  3. “On the Japanese manuscripts of the Chinese versions of the Nyāyamukha” (Yasutaka Muroya)
  4. 『正理門論』「誤難」セクションの梵語、注釈、沙門宗の注釈の総合的解読(小野・師・室屋・渡辺)
- (4) 第4回因明科研究研究会(2017.3.23, 東京学芸大学)
1. 「定寶による『如實論』十六難と『因

明正理門論』十四過類の対応」(師茂樹)

2. 『正理門論』「誤難」セクションの梵語、注釈、沙門宗の注釈の総合的解説(小野・師・室屋・渡辺)
- (5) 第5回因明科学研究会(2018.3.24)
  1. 「『判比量論』の研究動向」(師茂樹)
  2. 「玄奘訳『正理門論』の古形をたずねて：春日版を中心に」(室屋安孝)
  3. 『正理門論』「誤難」セクションの梵語、注釈、沙門宗の注釈の総合的解説(小野・師・室屋・渡辺)
- (6) 調査旅行(2015.12.14-18)ライプチヒ大学における『量評釈莊嚴』に対するヤマールの注釈文献梵語写本の解説研究(E. Franco 教授主催)に参加し、意見交換を行う。(護山・稲見)

#### 4. 研究成果

本研究の成果の最も重要な部分は、2017.8.23 にトロント大学で開催された第18回国際仏教学会学術会議(XVIIIth Congress of the International Association of Buddhist Studies)で採択されたパネル“Transmission and Transformation of Buddhist Logic and Epistemology in East Asia (I), (II)”での発表と討議にまとめられている。その第一部においては、ディグナーガ以前の論理学書のなかに漢訳でのみ残される『如実論』の考察(小野)から、「間違った主張」(paksābhāsa)をめぐるインド仏教内部での見解と因明学の伝統における解釈との比較(稲見)まで、インド仏教論理学の研究に漢訳文献ならびに因明学文献がどのように利用可能であるか、またその問題点が論じられた。第一部には他に室屋・渡辺、海外からの招聘研究であるB. Gillon, H. Lasicの発表が行われた。一方、第二部では、東アジアの仏教文献・因明学文献を扱う際に、インド仏教からの影響とその受容にどのような問題があるのか、という観点から、複数の発表が行われた。そのなかには、清弁が使用し、玄奘も使用する「真故」の限定句の機能をめぐる考察(師)や、基の四相違解釈がもつ論理的な性格に関する考察(護山)の他に、H. He, 小林久泰の発表が含まれる。これらの成果は、ウィーン大学から刊行されるWiener Studien zur Tibetologie und Buddhismuskund (WSTB)シリーズからの出版が予定されており、現在、そのための編集作業を行っている段階である。そのため、詳細な成果は、その刊行物にて報告する。

それ以外では、本研究の所期の目的に対して、以下の成果があげられた。

- (1) ジネンドラブッディの『集量論注』第6章の校訂を通して、小野・室屋・渡辺は、『集量論』「過類」段の梵文テキストの再構築の作業をおおよそそのところまで完成させた。また、その作業の過程で、『正理門論』「過類」段についても、平行箇所から、その梵文の推定作業を完了し

た。これらの成果は、ディグナーガ研究に多大な貢献をなすものとして特筆される。

- (2) 本研究会での共同研究により、上記の『正理門論』「過類」段については、師が研究を進めた沙門宗による注釈およびそこに言及される玄奘門下の学僧たちの解釈が、解説の有力な手助けになることが確認された。この点で、中村の評価とは異なり、因明文献は、インド仏教論理学を多角的に理解するために必須のツールとして再評価されるべきとの共通理解が得られた。
- (3) 討論の場面における誤った論難の定義と解釈をめぐる研究は、本研究全体にも一つの視点を与えた。日本印度学仏教学会第66回学術大会におけるパネルでは、小野・室屋・渡辺の三氏により、インドにおける討論の伝統から仏教論理学が生成する転換点となる、ディグナーガの『正理門論』『集量論』とその前後、特にヴァスバンドゥ(Vasubandhu, 4-5世紀)の『論軌』、ダルマキールティ(Dharmakīrti, 7世紀)の解釈までを視野に入れた思想史が解明された。
- (4) ディグナーガの論理学には討論術の伝統の残滓がある。四相違の一つである有法自相相違因は、ダルマキールティ流の遍充関係を基盤とする論理学の体系からは逸脱ともみなされるが、討論の伝統を前提とすることでその正意が理解される。その点で、玄奘から教えを受けた基の四相違解釈は、的確に、討論の文脈で四相違を捉えるべきことを指摘している。
- (5) 討論の伝統からインド論理学および因明学の伝統を見直すという点では、同じくディグナーガとダルマキールティの間の時代に活躍した勝軍(Jayasena)による大乘経典仏説論証と玄奘による批判、さらにその批判に対する善珠の指摘などを詳細に分析した師の貴重な成果がある。ここでは、ディグナーガの論理学は、論理的必然性の観点からではなく、討論の場面における論理的過失の発見のための道具として活用されていることが分かる。
- (6) 師は、伝統的には玄奘の名前に帰せられる唯識比量の位置づけの見直しを進めた。すなわち、文軌の『因明入正理論疏』における唯識比量の取り上げ方を分析し、それが基による唯識比量の扱いと大きく異なることから、唯識比量を玄奘に帰属させる従来の理解に疑問を提示した。師によれば、文軌の理解を前提にするかぎり、唯識比量は玄奘が弟子たちに論理的な諸過失を教えるために提示したものであったが、基により、それが正しい推論式として再解釈された可能性がある。
- (7) また、稲見の研究により、因明学におけるディグナーガ理解の一部には、インドにおいてダルマキールティによって否定される彼以前のディグナーガ解釈との類

- 似性が見てとれ、ダルマキールティの解釈の革新性が逆に浮き彫りになった。また、『因明入正理論』によって東アジアに伝えられる論理学の伝統がダルマキールティ以降のインドにおいても完全には消滅せずに存続していたことが確認された。
- (8) 師は、明治期に活躍した雲英晃耀・大西祝・村上専精等の仏教学者・論理学者たちが、どのように因明学の伝統を受容し、それを近代化が進む日本の社会のなかに組み入れようとしていたのか、という問題を論じている。特に雲英が実践としての因明という点から議会などの議論の場面で因明が活用できることを説いたこと、大西が因明の論理を演繹的な論理として解釈したことなどは、今、あらためて見直す価値がある。
- (9) また、室屋は日本の古写経や古版経に伝わる『正理門論』写本および版本の調査を行ない、玄奘訳、義浄訳それぞれの本文系統を検証した。特に玄奘訳『正理門論』について、大正蔵の底本とする高麗蔵再雕本や現存する中国系の刊刻大蔵経に未収録の異読の多数あることを確認し、その正当性を唐代の正理門論疏の佚文から実証的に示すことで、玄奘による複数の書き換えの想定される『正理門論』漢訳の特異な伝播状況と、中国などでは散逸した本文を伝承すると推定される古写経および春日版の重要性を指摘した。これは、漢訳『正理門論』のテキスト校訂のための貴重な礎石となる研究である。

##### 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 18 件)

- ① 護山真也, 「『因明入正理論疏』における四相違の解釈(下)」, 『信州大学人文科学論集』, 第 5 号, 1-28, 2018, 査読有
- ② MORO, Shigeki, “Jayasena’s Proof of the Authenticity of the Mahāyāna Scriptures”, *Journal of Indian Philosophy*, 46, 339-353, 2018, 査読有
- ③ MUROYA, Yasutaka, “The Nyāyamukha and udghaṭitajñā,” *Journal of Indian Philosophy*, 45(2), 2017, 281–311, 査読有
- ④ 小野基, 「Vādaḍidhi の誤難論とディグナーガの批判」, 『インド論理学研究』, 10, 43-92, 2017, 査読有
- ⑤ 室屋安孝, 「『因明正理門論』の梵文断片をめぐって」, 『インド論理学研究』, 10, 93-140, 2017, 査読有
- ⑥ 渡辺俊和, 「nyūna および jāti に関するディグナーガの見解—その変遷と背景について—」, 『インド論理学研究』, 10, 141-166, 2017, 査読有
- ⑦ MORO, Shigeki, “Counterargument to the West: Buddhist Logicians’ Criticisms of Christianity and Republicanism in Meiji Japan”, *International Journal of Buddhist Thought and Culture*, 27, 181-204, 2017, 査読有
- ⑧ 師茂樹, 「元曉『中邊分別論疏』の思想史上の位置とその意義」, 『21 世紀元曉學の意味と展望: 元曉撰述文獻の系譜學的省察』, 187-225, 2017, 査読無
- ⑨ 師茂樹, 「明治時期的日本因明研究概況」, 『青藏高原論壇』2017(4), 58-78, 2017, 査読無
- ⑩ 桂紹隆, 「明治維新之后的日本因明研究概況」, 『青藏高原論壇』2017(4), 17-43, 2017, 査読無
- ⑪ 小野基, 「『因明正理門論』過類段偈頌の原文推定とその問題点」, 『印度学仏教学研究』, 66/1, 450-456, 2017, 査読有
- ⑫ 護山真也, 「『因明入正理論疏』における四相違の解釈(上)」, 『信州大学人文科学論集』, 4, 1-20, 2017, 査読有
- ⑬ 小野基, 「『如実論』について」, 『印度学仏教学研究』, 65, 905-912, 2017, 査読有
- ⑭ MORO, Shigeki, “Proof of vijñaptimātratā and Mungwe”, *Journal of Indian and Buddhist Studies*, 65, 1295-1301, 2017, 査読有
- ⑮ 稲見正浩, 「宝石の光に対する宝石の認識」, 『印度学仏教学研究』, 65, 291-296, 2016, 査読有
- ⑯ 小野基, 「過類(jāti)をめぐって—ディグナーガに至る vāda の伝統の解明への一視点—」, 『印度学仏教学研究』, 64, 274-275, 2016, 査読有
- ⑰ KATSURA, Shoryu, “A Report on the Study of Sanskrit Manuscript of the Pramāṇasamuccayaṭikā”, *Journal of Indian and Buddhist Studies*, 64, 193-203, 2016, 査読有
- ⑱ 室屋安孝, 「漢訳『方便心論』の金剛寺本と興聖寺本をめぐって」, 『日本古写経研究所紀要』, 1, 13-34, 2016, 査読有

〔学会発表〕(計 27 件)

- ① MORIYAMA, Shinya, “Dharmapāla’s cognition of other’s minds (paracittajñāna)”, *International Workshop: Reevaluation of East Asian Yogācāra Texts*, 2018.
- ② 師茂樹, 「村上専精『活用講述因明学全書』の思想」, 国際シンポジウム「村上専精と近代日本仏教」, 2017.
- ③ 小野基, 「『因明正理門論』過類段偈頌の原文推定とその問題点」, 日本印度学仏教学会第 68 回学術大会, 2017.
- ④ ONO, Motoi, “A Reconsideration of Pre-Dignāga Buddhist Texts on Logic – the \*Upāyahrdaya, the Dialectical Portion of the Spitzer Manuscript and the \*Tarkaśāstra”, XVIIIth Congress of the International Association of Buddhist Studies (IABS), 2017.
- ⑤ MUROYA, Yasutaka, “On a fragment of Dignāga’s Nyāyamukha”, XVIIIth Congress of IABS, 2017.

- ⑥ WATANABE, Toshikazu, “On the concept of *nyūna* in Dignāga’s theory of fallacy”, XVIIIth Congress of IABS, 2017.
- ⑦ INAMI, Masahiro, “Pre-Dharmakīrti Interpretations of Dignāga’s Theory of *pakṣābhāsa*”, XVIIIth Congress of IABS, 2017.
- ⑧ MORO, Shigeki, “Was there a dispute between Dharmapāla and Bhāviveka? East Asian Discussions on their Proofs of *śūnyatā*”, XVIIIth Congress of IABS, 2017.
- ⑨ MORIYAMA, Shinya, “Kuiji on the four kinds of contradictory reasons (*viruddhahetu*)”, XVIIIth Congress of IABS, 2017.
- ⑩ ONO, Motoi, “On the Sanskrit Reconstruction of the Verses in the jāti Section of the *Nyāyamukha* and some Related Problems”, The 2<sup>nd</sup> International Symposium on Hetuvidyā, 2017.
- ⑪ 師茂樹, 「元曉『中邊分別論疏』の思想史上の位置とその意義」, 21 世紀元曉學の意味と展望: 元曉撰述文獻の系譜學的省察, 2017.
- ⑫ MORIYAMA, Shinya, “Some Remarks on *dharmisvarūpaviparītasādhana*”, International Symposium: Indo-Chinese Cultural Relations through Buddhist Path of Transcendence, 2016.
- ⑬ ONO, Motoi, “On the *Rushi lun* (如實論) – Its Original Title, the Issue of Its Incompleteness, and Its Authorship”, International Symposium: Indo-Chinese Cultural Relations through Buddhist Path of Transcendence, 2016.
- ⑭ 師茂樹, 「唯識比量に対する新羅からの批判一文軌『因明入正理論疏』を中心に」, 日本印度学仏教学会第 67 回学術大会, 2016.
- ⑮ 小野基, 「『如實論』について」, 日本印度学仏教学会第 67 回学術大会, 2016.
- ⑯ ONO, Motoi, “On the Importance of a Sanskrit Manuscript of Chapter 6 of the *Pramāṇasamuccayaṭīkā* in Research on the Buddhist *vāda* tradition”, The 6th Beijing International Seminar on Tibetan Studies, 2016.
- ⑰ KATSURA, Shoryu, “*Arthasaṃvedana* and *svasaṃvedana* in Buddhist epistemological tradition”, International symposium: Buddhist Philosophy of Consciousness: Tradition and Dialogue, 2016.

[その他]

- ① 第 1 回因明科研研究会の報告  
[http://www.shinshu-u.ac.jp/faculty/arts/prof/moriyama\\_1/2015/09/100832.php](http://www.shinshu-u.ac.jp/faculty/arts/prof/moriyama_1/2015/09/100832.php)
- ② 第 2 回因明科研研究会の報告  
[http://www.shinshu-u.ac.jp/faculty/arts/prof/moriyama\\_1/2016/03/100838.php](http://www.shinshu-u.ac.jp/faculty/arts/prof/moriyama_1/2016/03/100838.php)

- ③ 第 3 回因明科研研究会の報告  
[http://www.shinshu-u.ac.jp/faculty/arts/prof/moriyama\\_1/2016/09/100841.php](http://www.shinshu-u.ac.jp/faculty/arts/prof/moriyama_1/2016/09/100841.php)
- ④ 第 4 回因明科研研究会の報告  
[http://www.shinshu-u.ac.jp/faculty/arts/prof/moriyama\\_1/2017/03/104301.php](http://www.shinshu-u.ac.jp/faculty/arts/prof/moriyama_1/2017/03/104301.php)
- ⑤ IABS パネルのプログラム  
<http://www.iabs2017-uoft.ca/programme/>

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

護山 真也 (MORIYAMA, Shinya)  
信州大学・学術研究院人文科学系・准教授  
研究者番号: 60467199

### (2) 研究分担者

小野 基 (ONO, Motoi)  
筑波大学・人文社会系・教授  
研究者番号: 00272120  
稲見 正浩 (INAMI, Masahiro)  
東京学芸大学・教育学部・教授  
研究者番号: 70201936  
師 茂樹 (MORO, Shigeki)  
花園大学・文学部・教授  
研究者番号: 70351294

### (3) 連携研究者

桂 紹隆 (KATSURA, Shoryu)  
龍谷大学・龍谷大学世界仏教文化研究センター・研究フェロー  
研究者番号: 50097903  
船山 徹 (FUNAYAMA, Toru)  
京都大学・人文科学研究所・教授  
研究者番号: 70209154  
早坂 俊廣 (HAYASAKA, Toshihiro)  
信州大学・学術研究院人文科学系・教授  
研究者番号: 10259963

### (4) 研究協力者

室屋 安孝 (MUROYA, Yasutaka)  
オーストリア科学アカデミー・研究員  
渡辺 俊和 (WATANABE, Toshikazu)  
国学院大学・文学部・助教  
研究者番号: 20822159